

大学院獣医生命科学研究科

令和 7(2025)年度 第 1 次入学試験

獣医学専攻 博士課程

専 門 科 目

獣 医 放 射 線 学

「解答例」

犬と猫の喉頭疾患はそれぞれの病態、診断、治療について異なる点がある。まずは犬の喉頭疾患について発生しやすいものは、短頭種気道症候群(BAS)や喉頭麻痺が多くを占め、いずれも短頭種や高齢の大型犬に発生しやすいといった品種との関連性が認められる。一方で猫の喉頭疾患は喉頭腫瘍と喉頭炎が多くを占め、これら疾患は品種との関連性は認められていない。猫の喉頭腫瘍はリンパ腫がもっとも多く、続いて扁平上皮癌の発生が多い。喉頭疾患を疑う臨床徴候として変声や嘔声、むせやえずき、ストライダー、嚥下障害、咳などが一般的である。診断としては喉頭の X 線検査、超音波検査、必要に応じて嚥下機能を評価する造影剤を用いた X 線透視検査を行い、確定診断としては麻酔を用いた喉頭内視鏡検査および必要に応じて病理組織検査を行う。X 線検査では明らかな腫瘍が認められれば判断ができるが、粘膜腫脹などの微細な変化については検出できない。また犬で多い喉頭麻痺や BAS にと伴う喉頭虚脱などの動的な変化は検出できない。そのため X 線検査にて明らかな異常がない場合にも喉頭疾患は否定できない。喉頭超音波検査では、喉頭の運動性や粘膜の腫脹、披裂軟骨の構造などの評価を行うことができる。喉頭疾患を有する場合、気管挿管を用いた麻酔処置のリスクが高く、鎮静処置を行なったものの気管挿管できない、もしくは気管挿管したが喉頭が腫脹し抜管できないことなどが生じる可能性がある。そのような場面のリスク評価を行うことに喉頭超音波検査は有用である。確定診断のための麻酔下での喉頭内視鏡検査は、自発呼吸を止めないような麻酔深度で喉頭の運動性を評価し、生検が必要な場合は実施する。猫の喉頭炎は喉頭腫瘍と内視鏡画像をはじめとした検査所見が類似するため、鑑別のため病理組織検査が必要である。治療については、犬の喉頭疾患に多い BAS や喉頭麻痺の場合は外科療法が主となる。BAS の場合は、外鼻孔拡大術、軟口蓋切除術、喉頭小嚢切除が主な治療であり、喉頭麻痺の場合には背景にある疾患にもよるが、披裂軟骨側方化術が選択されることが多い。一方で猫の喉頭疾患の場合、喉頭腫瘍ではリンパ腫であれば放射線療法や化学療法に治療反応が得られる可能性があるが、そのほかの病理組織型の腫瘍である扁平上皮癌などは著しい効果が期待できる治療法が報告されていない。喉頭炎の場合、感染が主体でない時には多くの場合ステロイド薬の使用を行うが、喉頭炎で腫瘍を形成している場合には外科切除が必要となることがある。